

幼児に対する保護者と保育者の評価に関する検討

○ 玉木彩水 (立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科), 永浜明子 (立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科)

キーワード: 社会的スキル・一致度・遊び・身体活動

1. 緒言・目的

幼児期は、生活の半分以上を占める遊びから身体性を実感し、遊びのルールだけでなく、倫理、人との関わり方等を学ぶ。幼児期運動指針(2012)は、幼児期の遊びを中心とする十分な身体活動を行うことが心身にポジティブな影響を及ぼすことから、毎日60分以上、楽しく体を動かすことを推奨している。保育者や保護者が、遊びからその子の「今」を捉え、身体活動を含む生活を支援するためには、保育者と保護者の一致した適切な評価が不可欠である。永浜・長積・斎藤(2014)は、6歳から17歳の障がいのある子どもを対象とした運動能力に関する評価研究において、保護者は指導者より自分の子どもの運動能力を過小に評価する傾向にあることを報告した。この結果は、幼児期の身体活動の評価においても同じになることが予想される。また、保育者と保護者の子どもの行動上の問題に対する認識の差においては、保護者は楽観的評価をする傾向にある(大神, 2011)。しかし、保育者と保護者との認識・評価の差に関する検討は十分になされていない。

そこで、本研究は、幼児教育における幼児の発達に関する保育者と保護者の評価のずれに着目し、一致率の検討、および、評価のずれの詳細を明らかにし、身体活動を評価する際の基礎資料とすることを目的とした。

2. 研究方法

対象園に通う4・5歳児クラスの全びから保護者(47名)に対し、社会的スキルに関するアンケート「幼児用社会的スキル尺度」を実施した結果、17名の回答を得た。その内訳は、4歳児の男児5名、女児4名、計9名の保護者と5歳児の男児3名、女児5名、計8名の保護者であった。また、対象者となる4歳児の担当保育者2名、5歳児の担当保育者2名の計4名にも同様のアンケートを実施した。調査時期は2019年の8月であった。統計学的分析は、IBM SPSS Statistics ver.22を用い、有意水準は5%とした。年齢により、保育者が異なるため、分析は年齢別に行った。各対象幼児における保護者と保育者の回答一致率は、Weighted kappa (k係数)にて算出した。各質問項目における保護者と保育士との評価の差は、Mann-WhitneyのU検を用いて算出した。

3. 結果

(1) 対象児別にみた保育者と保護者の評価の一致率

4歳児では、対象児4名の一致率が低く($k < 0.1$)、4名のうち、2名は保育者が保護者より高く評価し、残りの2名は、保護者が高く評価する傾向にあった。また、2名の幼児においては、保育者と保護者の評価は中程度($k > 0.4$)一致していた。5歳児では、すべての幼児において一致率は低かった($k < 0.4$)。2名の幼児においては、特に一致率が低く($k < 0.1$)、保護者が保育者よりも高く評価する傾向にあった。そのうち、1名の保護者は、すべての項目において保育者より高い評価であった。

(2) 質問別にみた保育者と保護者の評価のずれ

4歳児では、全質問項目において、保育者と保護者に有意な差が認められなかった。5歳児では、「友達をいろいろな活動に誘う」($p = .03$)、「自分から友だちに話しかける」($p = .05$)の2つの質問項目において有意差がみられ、保護者が保育士よりも高い評価をつける傾向にあった。

4. 考察・結論

一致率が低く、保護者が保育者より高く評価をつけた、5歳児2名、4歳児2名においては、保護者が家庭の様子から想像できる園での姿と保育者が実際に見る他児との関わり方が、異なっている可能性が考えられる。5歳児の質問項目別結果を踏まえると、保護者は、保護者の指示に従うことと他児との関わりかたを同様に評価しているとも推察される。一方、保育者が保護者より高く評価した4歳児の対象児2名においては、家庭での様子とは異なり、他児との関わりで、上手く自分を表現できている幼児と言える。社会的スキルの合計点に着目すると、保護者が保育者より高く評価した対象児は、4歳児4名、5歳児6名と、ばらついており、保育者と保護者の評価のずれは、対象児によって異なる。また、日常生活から評価可能な社会的スキルの評価において、保育者と保護者に差があることから、日常生活で目にするものの少ない運動能力の評価では、さらに差が出る可能性が高く、詳細な検討が今後の課題であると言える。

5. 主要な引用参考文献

永浜明子, 長積仁, 斎藤直(2015)障がいのある子どもの運動能力に対する保護者の評価. 2014年度笹川スポーツ研究助成報告書, pp:187-197